第３章

校内研修活性化のポイントに沿った具体的実践

長崎県教育センター

校内研修活性化のためのポイントに沿った検証

長崎県教育センターでは、小学校２校、中学校２校、特別支援学校３校の研究協力校とともに、本手引き書の第１、２章（理論編）で提案している「校内研修活性化のための五つのポイント」に沿った実践研究を２年間にわたって進めてきました。大規模校、小規模校、それぞれの特長を生かした校内研修の推進、校内に高い専門性をもつ職員が在籍している状況、様々な年齢層の職員で構成されている学校の状況を生かした校内研修の運営など、各研究協力校の特長、強みを生かした研究を行い、その成果について検証しました。皆さんの学校の実態や状況に応じて、第３章「実践編」をお読みいただき、必要とする情報の検索を行ってください。

1 研修過程を充実する

「学力調査を活用した学校改善・授業改善に有効なプランは？」

少人数の職員、少人数の児童、小規模校の特長を生かした課題の洗い出し 西海市立西海北小学校　第３章９ページ参照

学校改善・授業改善プランの有効性の追究は、課題の具体的分析から始まります。学力調査の結果や独自のアンケート調査等から課題を具体的に分析することが有効なプランづくりの第一歩です。

「年間を通じた研修の各過程で職員の研修意欲や課題意識を高めるには？」

職員間の合意形成を図る研修過程の工夫と充実 長崎県立ろう学校佐世保分校　第３章３３ページ参照

全職員が研究の目的、達成のための手法、最終的なゴールの姿を、研究の各過程で確認し合い、協働して次なる改善に向かえるように、研修過程の工夫と充実を図ることが必要になります。

2 教育資源を積極的に活用する

「職員一人一人の専門性を引き出すには？」

内部講師を効果的に活用し、職員一人一人の専門性を引き出す研修 長崎県立盲学校　第３章２７ページ参照

職員の必要感の高い研修テーマの設定や内部講師の活用、また、職員の特長を生かして各研究部の部員を構成することで、職員一人一人の専門性を引き出すことができます。

「自校の実態や状況から研究の具体を構想するには？」

内部講師の講義による研究内容の理解促進 長崎県立ろう学校佐世保分校　第３章３３ページ参照

研究テーマについて共通理解を図り、研究の具体を構想し見通しをもつためには、研究開始時に校内職員が講師を務め、自校の実態や状況と研究テーマを重ね合わせて研修を深めると効果的です。

③ＳＧＡを生かして組織力を高める

「教科部会や研究部会と全体会を効果的につなぐには？」

全教科共通の課題把握を出発点とした大人数の職員による協働研究 大村市立郡中学校　第３章１５ページ参照

各グループで協議した内容に共通点が見出される中で研究の課題が明確になります。各部会の協議内容を開き合い、共通点を見出して、みんなで取り組むことを明らかにすることが大切です。

「教科の壁を越えて互いの授業を磨き合うには？」

授業の視点を定め、教科の壁を越えて磨き合う授業研究会 東彼杵町立千綿中学校　第３章２１ページ参照

中学校で他の教科の授業研究会に積極的に参加し意見交換を活発に行うためには、全教科に共通する授業検証の視点を定め、視点に沿って授業研究会を行うことで授業を磨き合うことができます。

④参画型研修で協働意識を高める

「全職員が自分の役割を自覚し、協働意識を高めていくには？」

職員一人一人の当事者意識が高まるワークショップ型研修 松浦市立福島小学校　第３章３ページ参照

様々な年齢層の職員が混在したチームを編制し、多様な意見や考えを出し合うなかで、職員一人一人が自分の役割を見出し、共に動こうとする協働意識が高まります。

「授業研究会を効果的に運営するには？」

大規模校の強みを発揮するグループ研究やワークショップ型研修の効果的実施 長崎県立佐世保特別支援学校　第３章３９ページ参照

限られた時間の中で、より多くの職員が意見を出し合い、多種多様な意見が交わされるには、グループ協議の視点を明確にし、各グループの協議内容を効果的に開き合うことが大切です。

⑤成果を可視化し、課題を共有する

「児童・生徒の変容から職員の研修意欲を高めていくには？」

国や県の学力調査と学校の独自調査を連動させた課題改善の分析と成果の可視化 松浦市立福島小学校　第３章３ページ参照

職員の研修意欲の高まりは、何と言っても児童・生徒の成長にあります。国や県の学力調査と併せて、学校独自調査の結果分析を定期的に行うなど、児童・生徒の成長が実感できるものが必要です。

「授業改善の状況をどうやって確かめるの？」

改善の状況を確かめる評価問題の工夫と定期的な改善状況の点検 西海市立西海北小学校　第３章９ページ参照

一つの課題を様々な角度から確かめられる評価問題を作り、同じ課題の評価問題を時期をずらして何度も実施することで、研究の成果について可視化することができます。

次のページからは研究協力校の具体的実践です。各学校は五つのポイントの中から取組の重点を定め、実践研究を行っています。

学校の実態や状況に合わせて、重点ポイントを定めることも、校内研修の活性化を図るための大切なポイントです。

実践 1

意識調査をもとにした成果と課題の共有

松浦市立福島小学校

＜校内研修活性化のためのポイント＞

④参画型研修で協働意識を高める　⑤成果を可視化し、課題を共有する

1　校内研修活性化における研究テーマの設定理由

〇職員の参画意識を高めるワークショップ型研修の効果的な運用

〇意識調査をもとにした成果と課題の共有

児童の学力調査や意識調査などをもとに、学校としての課題を職員一人一人が当事者意識を持って学力向上のために主体的に校内研修に参加するようワークショップ型研修を取り入れ、職員間の力量を高め合い学び合っていく研修を設定する。

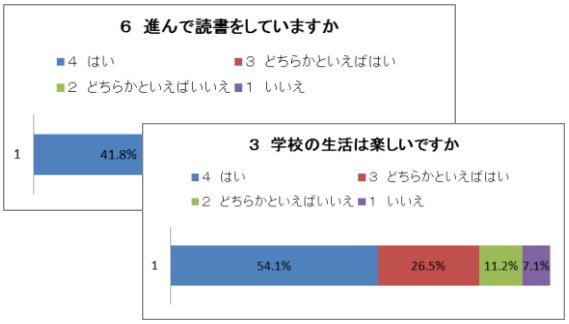
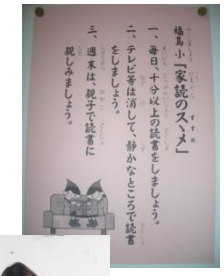
2　校内研修の歩み

（1）　校内研修活性化のためのＲＶ－ＰＤＣＡサイクル

月	H26	H27	研修内容　留意点	校内研修活性化のためのポイント
9月	R		学力調査結果から課題の共有 全国学力･学習状況調査の結果をもとに、学力の課題を職員で共有した。このことから、本校の重点課題「複数の情報から自分の考えを書くこと」が明らかとなった。学力調査の設問別正答率を活用することで課題が焦点化できた。 	⑤成果を可視化し、課題を共有する 客観評価・数値を基に課題をつかむ→校内研修の場で、学力調査結果の各設問の正答率、無回答率を全職員に配付する。各自がそこから見出した課題をワークショップ型研修で出し合う。数値を基にすることで、全職員が共通の課題を受け止めることになる。 ④参画型研修で協働意識を高める ＫＪ法→自校の学力課題につながる指導事項を、各学年から洗い出すことで、全学年で学力課題改善に取り組むことができる。本校で重点をおいて指導する単元が明確になる。
9月～11月	D C A		国語科授業改善・授業力向上 研究授業と研究協議会を行い、全職員が積極的に発言できるよう運営する。	④参画型研修で協働意識を高める ワークショップ型研修→授業改善の視点を絞ったマトリックス表を用いると、話題が焦点化される。ワークショップ型研修を繰り返し実施すると、意見が出しやすい雰囲気になる。栄養教諭や養護教諭も積極的に発言した。協議するグ

				ループを毎回、意図的に編成し、進行や発表の役割を適切に配当することで、ベテラン職員の姿を見ながら若手職員も進行やまとめができるようになる。
12月1月	R R		客観的な評価 学校評価を生かして保護者や地域の方の学校に対する期待や願いを知る。 重点課題の設定 これまでに取り組んできた校内研修の成果や、本校における学習・生活状況調査等からわかる課題を把握し、絞り込む。 今後の校内研修で、前述の学校課題を重点とし、改善するための取組等を構想することにする。 	⑤成果を可視化し、課題を共有する 客観評価・数値を基に課題をつかむ→学校評価と併せ、全国学力・学習状況調査の児童意識調査や、自校で実施している「すこやかカード（生活・学習状況調査）」の結果から、本校教育全般における教師の意識と児童の意識の差が明確になった。 「授業で『めあて』と『まとめ』を書く」、「家庭読書の推進」、「学校を楽しいと思う」の項目では、教師の取組意識と比較すると、児童の意識が低い傾向にあるという課題を全職員が共有することになった。 学校が持っている情報を基に、全職員で取り組むべき方向が明確になる。
2月3月	V		具体的方策の協議 学校経営方針を踏まえ、校内研修で取り組む来年度のテーマを決め、全職員、教育活動で学力向上を目指していくための組織の再編を考える。 意識調査項目の設定、授業改善の方策等について話し合う。 次年度校内研修組織の構想 次年度へ向け、以下の課題改善を図るための校内研修の組織再編を構想する。 ・「学校生活が楽しい」と児童が感じる学校生活の充実 ・「めあて」と「まとめ」が明確な授業の実践	⑤成果を可視化し、課題を共有する 行動目標→教育目標と学校経営方針を踏まえ、これまでに洗い出した課題を「意識調査」の項目とすることにより、児童・保護者・教職員がそれぞれの立場で、同じことに取り組むことができる。 ⑤成果を可視化し、課題を共有する 校内研修を推進する体制づくり→校内研修組織の再編を構想した際、職員間で課題が共有できているため、各部会の役割を理解した職員が積極的な発言をする。次年度の部会運営を推進し、研究主任をサポートする職員と共に研修を推進する体制が整ってくる。

			・主体的・計画的な家庭学習 ・家庭での読書活動の推進	
4 月 5 月		P	一年間の見通しの確認 昨年度の取組を分析し、見直した結果から見えてきた課題を改善するための研究テーマの設定、組織の編成を行う。 前年度のＲＶを踏まえて年間計画を立案する。	③ＳＧＡを生かして組織力を高める 組織の活用→研究推進委員会で、研究組織の編成、研究テーマの設定、年間計画の立案を行う。校務分掌を考慮した上で、若手育成を見通しながら、組織を編成し立案、実践を行うことで、若手とベテランがチームになって活動できる。全職員が自分の役割を認識し、協働することにつながる。
6 月 7 月		D	課題改善策の実践 児童主体の言語活動を取り入れた国語科授業研究を行う。 定期的に児童・保護者・教職員意識調査を行い、改善状況を把握したり、「すこやかカード」を年４回家庭に向けて調査したりすることで基本的な生活習慣の定着を図る。	④参画型研修で協働意識を高める ワークショップ型研修→初任者や若手職員が研究協議会で発言し、参加できるようワークショップ型研修を継続する。発言しやすい反面、課題の列挙にならないよう、改善策を検討する時間配分や運営を行うことが必要である。
		C	学力向上に向けて家庭の協力を得るために、親子で夏休みに一緒に取り組めることを例示する。その後、懇談会等で保護者の意見も取り入れ、夏休みの課題と共に配付する。 親子で楽しむ　夏休み ↑話し合いを基に作成した学校便り （保護者用）	⑤成果を可視化し、課題を共有する 検証軸を明確にした改善状況の把握→定期的に意識調査や「すこやかカード」の調査を行い、課題改善の状況を捉えることができる。 ④参画型で協働意識を高める ワークショップ型研修→職員で夏休みに親子で取り組むと、児童の生活体験が豊かになると考えられるものを出し合った。学校と家庭が協力して児童を育成する意識が向上した。
8 月 9 月		C A	成果の検証① 「全国学力･学習状況調査」「県学力調査」「児童・保護者・教職員意識調査」「すこやかカード」からデータを収集、追調査しながら改善状況を検証していく。	⑤成果を可視化し、課題を共有する マトリックス法→全職員で子どもたちの実態を把握し、課題を分析すると共に、これまでの改善状況と次の課題が明確になる。また、調査結果は、保護者へ公表することで、家庭との連携

				を図ることができる。 
10 月 11 月		D C A	さらなる授業改善 学力調査の結果から明らかになった課題を改善するための授業実践を行う。 重点課題「自分の考えをまとめる」ことの改善に向け、ワークシートを工夫し、自分の考えをまとめるようにさせる。 組織の活用・部会からの発信 読書推進部発信で「読書祭り」を立案し、実施する。親子でゆったりと本に関わる機会をつくることで、家庭にも読書推進を伝えることができた。	④参画型研修で協働意識を高める 隣接学年を生かした授業づくり→本校は単学級であるため、隣接学年や特別支援学級、専科の先生方とチームを組み、重点課題の改善を図るための研究授業づくりを行う。若手職員の授業づくりにベテラン職員が関わることで、互いに刺激となり、協働意識の高まりがみられる。 
12 月 1 月 2 月 3 月		C A R V	成果の検証② 学校評価、児童・保護者・教職員意識調査を行い、取組を行った成果を明らかにする。 活用教材を用いた調査問題を作成・実施し重点課題の改善状況をみる。 松浦市学力調査（２～４年）、前年度の全国学力・学習状況調査、県学力調査等を行い、重点課題の改善状況をみる。 来年度の見通し 一年間の取組の分析から把握した学力向上を目指すための研究テーマを設定する。	⑤成果を可視化し、課題を共有する 学校評価との効果的な連動→多面的な調査・評価・分析を行い、課題となっていた部分を中心に職員間で話し合う。また保護者向け、学校支援会議に向けて成果を明らかにし、課題改善のための意見をいただき、来年度の取組の構想に役立てる。 「すこやかカード」では個人のチェック表を集計し、個人の生活チェックだけでなく、学級や学校全体の傾向を知り課題を保護者に投げかけることで、学校と家庭の協力体制ができた。 ④参画型研修で協働意識を高める マトリックス法→今年度の課題改善の状況を評価し、来年度に向けての重点取組を明確にする。

（２）本校の特性を生かした校内研修活性化のポイントの設定理由

〇参画型研修で協働意識を高める

【校内研修活性化のためのポイント④】

今年度の職員の年齢構成が２０代と４０代以上ほぼ半々となった。若手育成のためにも、ベテランと若手が混在するＳＧＡを多く組みワークショップ型の研修を取り入れることで、協働意識を高め主体的に校内研修に参加できるようにした。

〇成果を可視化し、課題を共有する【校内研修活性化のためのポイント⑤】

学力向上のために、学力調査だけでなく意識調査や基本的生活習慣を定着させるための調査（すこやかカード）などを行い、全職員で児童の様子を客観的に把握し、具体的な成果を見取るようにした。

（３）実践の振り返り

「この２年間の校内研修で、『自分が変わった』と実感している。」

「座っているだけの研修から『自分が考える』研修になった。」

これは、あるベテラン教師が校内研修で発言した言葉である。経験豊富な教師が自らの変容を実感できる校内研修であったことが、本実践の価値だと考える。

「部会が機能していて、協働の体制ができている。」「若手であっても、安心して自分の考えを話せる。」「全体が同じ方向を向いて、お互いに高め合えた。」このような実感を伴う言葉が出てきたことは、以下のような取組からだと考える。

①職員の主体的な取組や意識の向上

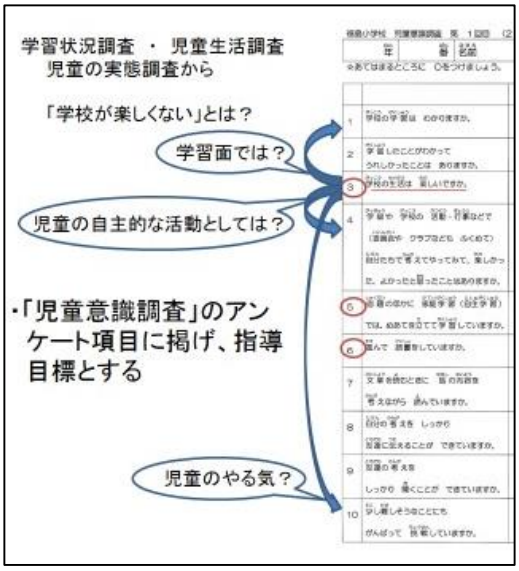
ア　参画型研修で協働意識を高める【校内研修活性化のためのポイント④】

ワークショップ型研修への取組当初は、授業研究会の付箋の数が少なかった。しかし、徐々に、成果と課題が多数出るようになり、少しずつ改善点が見出せるようになってきた。ベテラン職員の中で若手職員も意見を出すことができた。「授業づくりを通して先生方と話す機会が多く持てた」という若手職員の意見があった。今後は、課題の改善策を試行することで、さらなる授業改善を図りたい。

イ　成果を可視化し、課題を共有する

【校内研修活性化のためのポイント⑤】

学力調査、意識調査、生活チェックカード（すこやかカード）等のデータを数値・グラフ化することにより、職員間で課題を共有することができた。集計が負担にならず、課題や変容を把握しやすい資料等の作成が次の課題である。

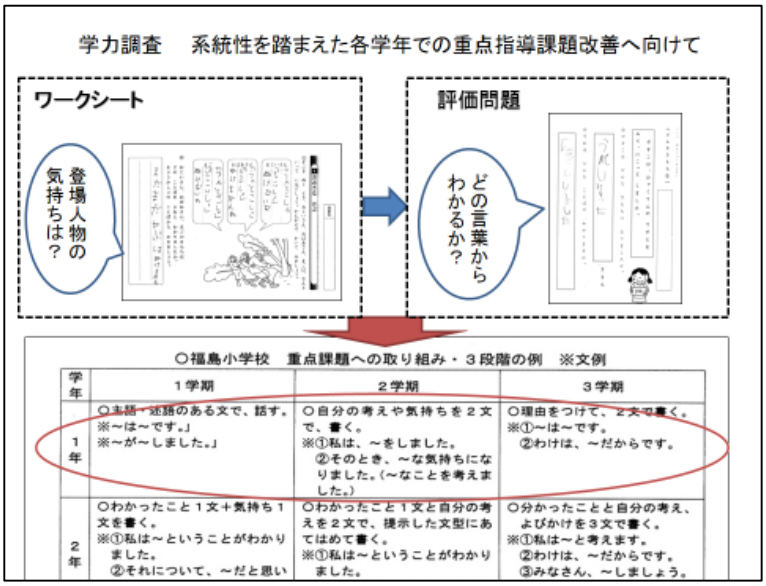


②児童や保護者の意識の変容

児童意識調査、保護者意識調査の全項目で平均値以上の成果が表れている。しかし、全体的な数値のみだけでなく、意識調査で「学校を楽しいと感じる」と答えていない児童への面談を実施したり、教師の言葉かけを増やしたりして、実態把握をもとにした指導改善を行った。また、学校生活が魅力的なものとなるよう「学力の向上、特別活動への取組」など多角的な面から教育活動を見直した。実態把握は、教育活動の改善を促進するものとして有効であるため、今後は、学校評価等を十分に活用することを進めたい。

③学力の向上

重点課題改善への取組を通して、自分の考えを書くことで、自分の考えをまとめて書くことができる児童が増えた。



④実践研究のまとめ

学校評価や学力調査等を基に自校の課題を全職員が共有したことで、各自が果たすべき役割が明確になり組織力と取組意欲が向上した。ワークショップ型研修を生かすことで、職員間での活発な意見交換が行われるようになった。職員の意見から課題改善への取組を焦点化し、自校の課題を意識できるよう「意識調査」を実施した。調査結果は常に右肩上がりといえないが、児童の実態把握と教育活動の在り方を振り返る指針として活用し、本校の教育活動を全職員でよりよいものにしていく校内研修をさらに推進したいと考える。

実践2

ＲとＶを充実し、参画型研修を効果的に運用し、課題を共有する

西海市立西海北小学校

＜校内研修活性化のためのポイント＞

①研修過程を充実する　⑤成果を可視化し、課題を共有する

１　校内研修活性化における研究テーマの設定理由

本校は職員数が少なく、組織立った専門部などの活動が行いにくい状況であった。ＳＧＡを生かした話合いなどが二人ほどになり、話合いが活性化しないことがあった。

そこで、研究を焦点化し、話合いの視点を明確にした校内研修の構想が必要であると考えた。また、児童数が少なく、一人分の数値の影響力が大きいため量的な統計としての実態が把握しにくいという課題があった。

そこで、アンケートや適用問題の内容を精選し、計画的に実施し、分析結果を生かした授業改善が不可欠であると考えた。これらのことを全職員で共通理解し、共通実践していくことが校内研修の活性化になり、ひいては児童の学力向上へつながると考えた。

以上の理由で研究テーマを「ＲとＶを充実し、参画型研修を効果的に運用し、課題を共有する」と設定した。

２　校内研修の歩み

（１）　校内研修活性化のためのＲＶ－ＰＤＣＡサイクル

月	H26	H27	研修内容　留意点	校内研修活性化のためのポイント
３月	Ｒ Ｖ		次年度の方向性の確認 算数科授業アンケートの分析をもとに、児童と教員との意識の違いに着目し、次年度の課題と方向性を確認する。 	④参画型研修で協働意識を高める ワークショップ型研修法→調査結果を全職員で分析・考察する際は、ワークショップ型の研修を行うことで、次年度の課題と方向性を共通理解し、各々が自身の課題をとらえることができる。 ①研修過程を充実する 来年度のためのＲＶを済ませておくことで、次年度の研究をスムーズに始めることができる。
４月		Ｐ	一年間の見通しの確認 全職員、教育活動全体で学力向上を目指	④参画型研修で協働意識を高める 校内研修を推進する体制づくり→研究推進委員

			していくための研究組織の編成を行う。 一年間の取組の分析から把握した重点課題を改善するための研究テーマを設定する。 前年度のＲＶを踏まえて年間計画を立案する。	会・調査研究部・環境部を立ち上げ、それぞれが役割分担することで協働体制を作ることができる。 ①研修過程を充実する ワークショップ型研修法→研究の視点を二つに絞り、ワークショップ型協議をすることで、効果的・能率的な研究協議を目指すことができる。
５ 月 ６ 月		Ｄ	提案授業の実践 目指すべき授業像を提案するための研究授業を行う。 毎回、研究授業の前に全職員で模擬授業を行う。	①研修過程を充実する ワークショップ型協議の経験を生かした全体での授業研究→「書く活動」と「話し合う活動」に焦点を絞った研究協議により話合いの活性化を図るとともに、重点課題改善のための手立てを全職員で確認することができる。 本校では、これまでワークショップ型協議を重ねてきた。その結果、教職員の参画意識は十分に高まった。そこで、授業検討会などはワークショップ型協議ではなく、会議型の協議を行うこととした。 全職員で模擬授業を行うことで、授業者任せの授業づくりから脱却することができる。
			新しい研究体制での取組 研究推進委員会・調査研究部・環境部の活動を行う。 環境部を中心に、書く力・聞く力を育成するための「おはなし袋」作成に取り組む。	①研修過程を充実する 授業研究協議を焦点化することでできた余時間を、各部の活動時間に設定することができる。 各部での取組は、校内研修全体会で提案される。このことで、ボトムアップの研修を積み重ねることができる。
７ 月 ８ 月		Ｃ	方向性の確認 指導者招聘授業を行い、本市教育委員会に、研究の方向性について指導助言をいただく。	④参画型研修で協働意識を高める ワークショップ型協議の経験を生かした全体での授業研究→本年度の研究の方向性についての指導助言を全職員で受けた。模擬授業を実施し、公開授業で提案することや授業参観の視点を確認することができる。
			教育センターの出前講座を実施、受講する。	人的資源→教育センターによる出前講座を実施し、言語活動を取り入れた算数科授業づくりについて、今後取り組む内容を全職員で共通理解することができる。

９ 月			検証① 算数科授業アンケートを行い、データを収集・分析する。	⑤成果を可視化し、課題を共有する 算数科授業アンケートの実施 児童へのアンケートは複数回行い比較することで、研修の内容や方向性を検証することができる。
10 月		A	さらなる授業改善 これまでの研究授業及びアンケートをもとに､改善点を踏まえた授業を実施する。	④参画型研修で協働意識を高める ワークショップ型協議の経験を生かした全体での授業研究→「書く活動」と「話し合う活動」に焦点を絞った研究協議の継続。今回は、「書かせる」ためのワークシートの内容を協議することができた。
		D	さらなる授業改善 これまでの研究授業をもとに、改善点を踏まえた授業を実施する。	④参画型研修で協働意識を高める ワークショップ型協議の経験を生かした全体での授業研究→「書く活動」と「話し合う活動」に焦点を絞った研究協議の継続。模擬授業の実施。
11 月			さらなる授業改善 これまでの研究授業をもとに、改善点を踏まえた授業を実施する。	④参画型研修で協働意識を高める ワークショップ型協議を生かした授業研究→「書く活動」と「話し合う活動」に焦点を絞った研究協議の継続。模擬授業の実施。
12 月		C	検証② １回目適用問題を全学年に実施し、児童の変容をみるためのデータを収集し、来学期の改善策について検討を行う。	⑤成果を可視化し課題を共有する ①研修過程を充実する 適用問題（説明する力を評価する）を全児童に解かせる。この取組を複数回行い比較することで、授業改善が進んでいるか、教師の授業力を評価することができる。
		C	検証③ 全国学力・学習状況調査、県及び市の学力調査の分析報告会を行う。	⑤成果を可視化し課題を共有する 全職員で児童の実態を把握し、これまでの授業の振り返りと改善のための授業づくりについて協議することができる。
１ 月 ２ 月		C	検証④ ２回目適用問題を全学年に実施し、１回目との比較検討を行う。	①参画型研修で協働意識を高める ⑤成果を可視化し課題を共有する ワークショップ型協議→児童の適用問題解答状況を前回と比較し、これまでの研究に対する協

				議を行った。ワークショップ型協議を行うことで、初めての議題であっても全員が意見を述べることができる。
		R	検証⑤ 算数科授業アンケートを行い、データを収集・分析する。	①研修過程を充実する ④参画型研修で協働意識を高める ワークショップ型協議→児童と教職員の算数科授業に対する意識の変容を前回と比較する。ワークショップ型協議で具体的な改善策を見いだすことができる。
３月		V	１年間の振り返り	④参画型研修で協働意識を高める ワークショップ型協議→本年度の研究について「『書く活動』と『話し合う活動』に焦点化した授業づくりについて」と「研修体制」について振り返りを行い、来年度の方向性を決定することができる。

（２）　本校の特性を生かした校内研修活性化のポイントの設定理由

〇参画型研修で協働意識を高める【校内研修活性化のためのポイント④】

少ない職員数であることを利点と捉え、少人数であるからこそ全員参画の研修の体制作りが可能であり、共通実践していくことで校内研修の活性化を図ることを目指した。

〇研修過程を充実する【校内研修活性化のためのポイント①】

年度末に次年度の研修計画の概要を作成し、全職員が共通理解することは、校内研修を計画的かつ継続的に行うための一策であると考えた。

〇成果を可視化し、課題を共有する【校内研修活性化のためのポイント⑤】

児童数が少ないため一人分の数値の影響力が大きく、量的な統計としての実態が把握しにくい。そこで、アンケート、適用問題の内容を精選し計画的、定期的に複数回行い、結果を分析した。その結果をもとに、課題を理解し手立てを明確にして授業改善を共通実践していくことが、校内研修活性化になり、ひいては児童の学力向上へつながると考えた。

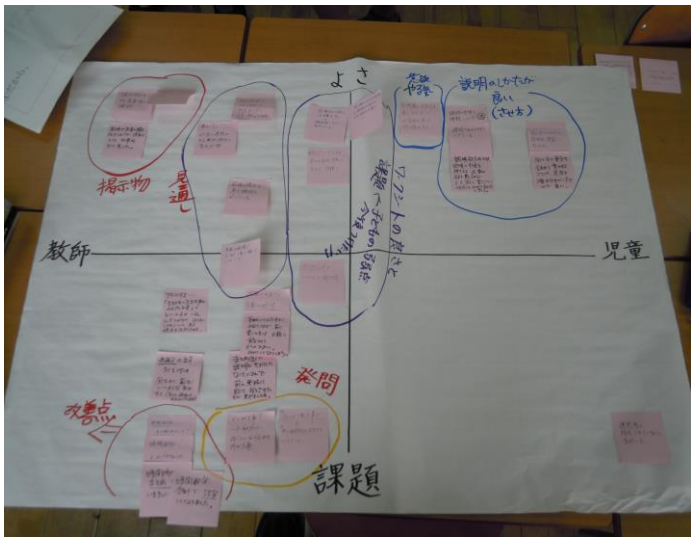
（３）　実践の振り返り

本校は、教職員数が１５名と少なく組織立った専門部などの活動が行いにくい状況であり、ＳＧＡを生かした話合いなどが二人ほどであるため、話合いが活性化しないことが課題であった。そのため、研究を焦点化し、話合いの視点を明確にした研究協議の構想が必要であると考えた。そこで、研究授業後の授業研究会でＫＪ法などのワークショップ型研修を取り入れた。授業を参観しながらその場で気付きを付箋に書いていくた

ワークショップ型研修

め、放課後の研究会をすぐに始めることが可能で、校内研修に余時間が生まれた。また、研究会が感想や気付きを述べるだけにならないよう事前に「書く活動」「話し合う活動」の二点に焦点化した観察の視点をもつように工夫した。

ワークショップ型研修で培った協働意識が全体での研修でも生きており、核心に迫る忌憚のない意見が飛び交う研修の雰囲気ができてきた。また、授業研究会後には余時間を使って必ず部会での活動時間を確保し、全職員で校内研修に関わる体制をとった。



概念化シートを用いた授業分析

①研修課程を充実する【校内研修活性化のためのポイント①】

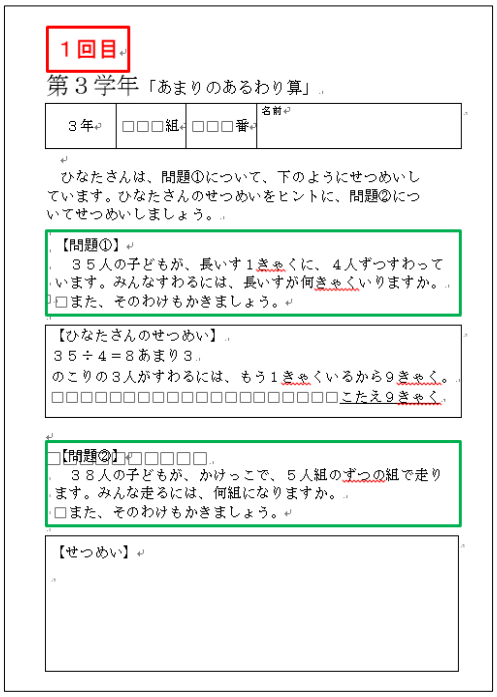
校内研修を計画的・組織的・継続的に行うためには、反省を基に次年度の計画を立て、教職員があらかじめ次年度の見通しをもっておく必要がある。そこで、２６年度２学期末に、「共通実践十策」を全職員で振り返り、さらに年度末には、教職員と児童に行った「算数科授業アンケート」を数値化し比較して課題を洗い出し、２７年度の研究計画を立てた。研修体制にも着眼し、調査研究部・環境部・授業研究部の各部会を次年度へ向けて立ち上げ、調査研究部はアンケートや学力調査の分析を、環境部は適用問題の集約、全校実践事項の「お話袋」の作成を、授業研究部は研究授業実施に取り組んだ。全職員が各部に所属し活動することで、協働意識の高まりはもとより、共通理解に基づき授業を組み立てることができた。また、算数科における言語事項の柱を「書く活動」「話し合う活動」に絞ることにより教育センター出前講座の開催も本校の研究内容に焦点化した講座を開いてもらうことができた。

「共通実践十策」の再検討

②成果を可視化し課題を共有する【校内研修活性化のためのポイント⑤】

児童数が少ないので一人分の数値の影響力が大きく量的な統計としての実態が把握しにくい。そこで、学校評価や児童・教職員へのアンケートに加え、年度に２回の適用問題を各学年に解かせた。適用問題は、

本校の研究である「算数科における言語活動」に関わる内容とし、２回の結果を比較して校内研修に対する評価を行った。明らかになった課題は全職員で共有し、授業改善ひいては次年度への方向性を検討する際の資料としても活用した。


１回目

第３学年「あまりのあるわり算」

３年	□□□組	□□□番	名前

ひなたさんは、問題①について、下のようにせつめいしています。ひなたさんのせつめいをヒントに、問題②についてせつめいしましょう。

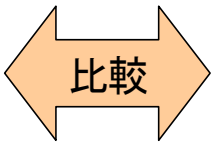
【問題①】
３５人の子どもが、長いす１きゃくに、４人ずつすわっています。みんなすわるには、長いすが何きゃくいりますか。
□また、そのわけもかきましょう。

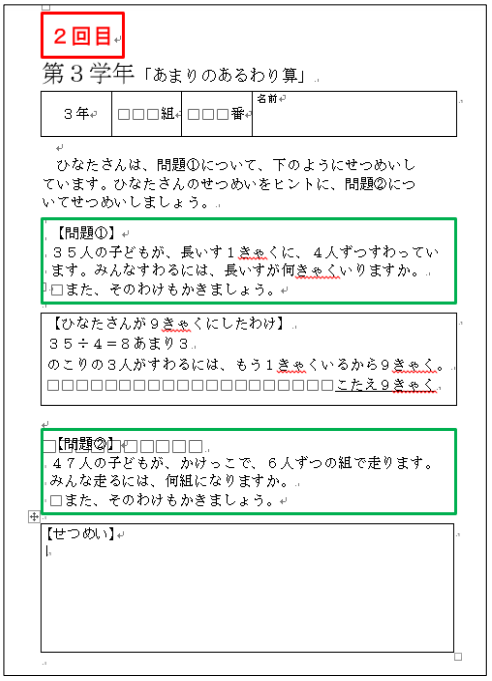
【ひなたさんのせつめい】
３５÷４＝８あまり３
のこりの３人がすわるには、もう１きゃくいるから９きゃく。
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□こたえ９きゃく

【問題②】□□□□□
３８人の子どもが、かけっこで、５人組のずつの組で走ります。みんな走るには、何組になりますか。
□また、そのわけもかきましょう。

【せつめい】

適用問題１回目




２回目

第３学年「あまりのあるわり算」

３年	□□□組	□□□番	名前

ひなたさんは、問題①について、下のようにせつめいしています。ひなたさんのせつめいをヒントに、問題②についてせつめいしましょう。

【問題①】
３５人の子どもが、長いす１きゃくに、４人ずつすわっています。みんなすわるには、長いすが何きゃくいりますか。
□また、そのわけもかきましょう。

【ひなたさんが９きゃくにしたわけ】
３５÷４＝８あまり３
のこりの３人がすわるには、もう１きゃくいるから９きゃく。
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□こたえ９きゃく

【問題②】□□□□□
４７人の子どもが、かけっこで、６人ずつの組で走ります。みんな走るには、何組になりますか。
□また、そのわけもかきましょう。

【せつめい】

適用問題２回目

昨年度末からの取組を通して、大きな成果の一つとして挙げられるのは本校の「同僚性」の高まりである。全職員による次年度の方向性の確認からスタートし、方向性・目指す授業を共通理解し、課題の共有も行った。研究授業の際は全職員による指導案検討会、その後模擬授業を実施し、授業者の意図や流れを把握して本時に臨むようにした。このような研修の流れの中で、個々での研修ではなく、職員全体での研修であるという横のつながりがより深まったように感じる。課題解決へ向けて、一丸となって協働していく体制が出来つつあることを感じる。

算数科における言語活動を柱として積んできた校内研修であるが、児童の学力の現状を見ると研究内容の改善点など課題もある。しかし、この２年間の校内研修で培ったチーム力で今後も解決策を見出し、課題解決に当たりたい。

校内研修の手引き～実践編～

校内研修活性化のためのポイントに沿った具体的実践

平成２８年３月発行

編集・発行　　長崎県教育センター

〒856-0834 大村市玖島一丁目 24-2

TEL 0957-53-1186（企画課）